



第11図 冬のある夜の旭川市内の局地現象 (昭和43.2.9).

ると、冬霧の減少は私が工場雪を追い回している頃すでに始まっていたのである。

工場雪の調査中、同じ頃細氷の調査をしていた仲間とある夜ジープで移動観測に出掛けた。第11図がそれである。午後10時、気象台 (M点) を出る時は雲の多い天気ではあったが見通しは割合よく、雪は降っていなかった。旭橋付近では川霧が流れており、河原のスケート・リンク (A点) は濃い霧の中にあった。移動してパルプの煙の流れている下のB点に行くと霧はなく、細かい雪 (工場雪) が降っていた。そして排水口上流の川面の凍る牛朱別河畔のC点では月が輝き、電灯光を透かして見ると、細氷がきらきらと写し出された。

今にして思うと、川霧の直接の広がり方は川沿いの一部

に限られ、旭川全体を覆う都市霧の本体は家庭を含め工場等から人為的に排出される凝結核物質や水分によっていたようだ。冬霧増加の主因を不凍河川に求めたのは私の誤りであったのかも知れない。しかし、パルプ工場があり、河川が凍らない限り、第11図のような細域の現象は今も現れているであろう。

10. あとがき

結局、昭和40年前後の数年間の調査で私が出た確信は今も揺らいでいる。しかし、調査の過程において体験した予期せざる現象から幾つかの大きな成果を得る事ができ、それにより知見を広めることが出来た。それは日々の業務にも反映でき、私の人生そのものでもあった。現象を見つめること、それは気象に親しむ者にとって価値のあることと思っている。

霧を知ることは、雲物理の追求、ひいては天気翻訳に通ずる。高松気象台で行った予報研修において、簡単な雲物理の話をした。受講生の感想には、そんなことよりも予報作業の手順等をもっと丁寧にやって欲しかったという意見があった。どうやら予報作業における思考過程の説き方が不十分であったらしい。

文 献

串崎利兵衛, 山本 晃, 1966: 上川地方の河川結氷の条件, 研究時報, 18, 353-359.
 ——, ——, 森 秀雄, 1966: 石狩川上流域の結氷と水温について, 研究時報, 18, 433-439.
 山本 晃, 1971: 工場雪, 雪氷, 32, 19-28.

日本気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所	備 考
第3回「大学と科学」公開シンポジウム	平成元年1月30日 ～2月1日	同組織委員会	経団連ホール	Vol. 35, No. 9
第4回オホーツク海と流水に関する国際シンポジウム	1989年2月5日 ～7日	オホーツク海・氷海研究グループ	紋別市民会館	Vol. 35, No. 10
日本気象学会 昭和64年度春季大会	平成元年5月24日 ～26日	日本気象学会	気象庁	Vol. 35, No. 12
理工学における同位元素研究発表会	1989年7月3日 ～5日	同運営委員会	国立教育会館	Vol. 36, No. 1
International Conference on Modelling of Global Climate Change and Variability	1989年9月11日 ～5日	Meteorologisches Institut der Universität Hamburg	ハンブルグ大学	